

テレビ番組からみる「多文化家族」の葛藤と相互理解 —韓国EBSの『多文化夫婦列伝』を事例に—

金 基淑

はじめに

2019年韓国の在留外国人は史上はじめて250万人を超え¹⁾、人口の4.9%を占めるようになった。在留資格別にみると、労働者、外国籍の同胞、結婚移民者、留学生などの順に多くなっている。とくに2004年から導入された外国人雇用許可制度、2000年代から急増した結婚移民者、留学生が在留外国人の増加に大きく貢献している。長い間、「単一民族」のイデオロギーとともに歩んできた韓国は、積極的に移民を受け入れているわけではないが目下多民族・多文化社会の入口に立たされ、他民族・異文化との共生を模索し始めている。

本稿は、韓国人の男性と結婚した外国からの移住女性とその家族で構成される多文化家族²⁾をとりあげ、彼女たちが夫やその家族、とくに姑・舅との日常生活のなかで経験する葛藤について考察し、その葛藤を乗り越え、相互理解をするためのヒントを提示することを目的とする。増え続ける結婚移住者を支援するために、韓国では2008年に多文化家族支援法が制定され、全国に多文化家族支援センターが設置された。しかし、10年以上に及ぶ同センターなどによる様々な支援事業や活動にもかかわらず、結婚移住女性のおかれた状況は依然厳しく、また家族間のトラブルも絶えない。こうし

た状況を注意深く観察し、主な問題点を整理し、葛藤の解消と相互理解のための提案をすることは意義あることと考える。

本論のために用いる資料は、韓国の教育放送EBSで2013年から放送中(週1回)の『多文化夫婦列伝』(「外国人嫁と韓国人姑のバトル」、以下『列伝』と記す)である³⁾。『列伝』はノンフィクションのロケ番組で、過度な演出や編集をせずに出演者たちの普段の生活を映像に収めており、番組の後半には嫁と姑が嫁の実家を訪問・滞在するという斬新な企画も盛り込まれている。韓国のテレビで多文化家族をとりあげた番組にはほかに民放SBS(ソウル放送局)の『일요일이 좋다—사돈 처음 뵙겠습니다(サドン⁴⁾はじめてお目にかかります)』(2007年11月~2008年7月)、公共放送KBS(韓国放送公社)の『러브인 아시아(Love in Asia)』(2005年11月~2015年2月)がある。この二つの番組はすでに終了しているが多文化家族の生活を紹介し、グローバル化時代の様々な人々への理解を深めると共に、家族の意味を再考するという目的で作られたものである。内容は、韓国に嫁いだ外国人女性とその家族の日常生活を紹介するとともに、実家の親を韓国に招待し番組に出演させたり、また夫の家族が嫁の実家を訪ねていくというものである。しかし、李が指摘するように、これらの番組は「韓国社会に同化しようと努力する女性や、

妻・嫁・母として韓国社会にすっかり同化した女性たちを対象としており、彼女たちの文化的アイデンティティを考慮せず、韓国社会の価値観を強要している」[李明현 2009: 322] とみることができよう。つまり、韓国の文化・社会に適応していく苦しい過程や、適応できずに様々な葛藤を抱えている結婚移住者たちには焦点が当てられていないのである。一方で『列伝』には、家族や韓国の文化などによる葛藤を抱え悩んでいる多くの移住女性が出演しており、多文化社会を迎えた韓国の社会や人々が外国にルーツをもつ他者との共生のためにはなにかに必要なのかについて考えさせてくれる。こうした背景もあり、本稿では『列伝』を資料として用いる。

一般にインタビュー調査では家庭内の些細なことやデリケートな事柄は質問しにくく、また直接観察する機会もなかなかないのだが、『列伝』のドキュメンタリー的映像は葛藤が起きている現場の状況を観察できる機会を与えてくれており、番組制作側の意図がどこにあるにせよ、資料として十分意味のあるものと思われる。

I 韓国における多文化時代の到来

1. 少子高齢化と外国人労働者の受け入れ

2019年韓国の合計特殊出生率は0.92で、女性が生涯産む子供の数が世界で唯一一人未満の国となった⁵⁾。現在の人口を維持するために必要とされる2.1人の半分以下であり、またOECD加盟国の平均合計特殊出生率(1.65)よりもかなり低い。2006年から続く韓国政府による少子化(韓国では「低出産」という)対策にもかかわらずその減少率が下がり続けている。なぜ韓国はここまで合計特殊出生率が低くなってしまったのだろうか。その主な理由として、まず2、30代の人口が減少したこと、若い世代の就職難により安定した収入が期待できず未婚

や晩婚⁶⁾、または結婚を諦める傾向が強いこと⁷⁾、さらに結婚をしても主に経済的な理由により出産を望まないことなどがあげられる。不確実な未来への不安や価値観の変化などが若者の結婚と出産に対する考え方を変えているといえる。このままであれば、2060年代には韓国の人口は現在の約5,100万人から約3,900万人に減少すると予測されている⁸⁾。人口減少が経済成長や雇用、福祉などに悪影響を与えることを考えると、韓国の少子化は深刻な状況といわざるを得ない。

韓国の少子化対策は低い出産率の根本的原因を解決することに重点がおかれてきたというより、子育て家庭の福祉に支援が集中しているとの指摘もある。若者のための仕事の創出、女性の結婚後のキャリア断絶の問題、住居費や教育費の高騰、働き方の改革などのような構造的な問題が解決されなければ未婚化および少子化の解決は難しいであろう。

労働力不足を補うために韓国政府は外国人労働者を受け入れているが、ここでは、野村敦子の「韓国における外国人材政策」[2019: 140—143]を参考に、韓国における外国人労働者受け入れに関する法律の制定を中心に紹介しておく。

韓国は、非熟練分野での労働力不足を解決するために、1993年 産業研修生制度(日本の技能実習生制度に類似)が導入された(2007年1月に廃止)。これは従業員300人以下の中小企業が外国人を研修生として1年間雇用でき、必要な場合は研修期間をもう1年延長できる制度である。2002年には就業管理制度が導入され、中国・旧ソ連等の韓国系外国人(在外同胞)を対象に、サービス業(飲食、ビル清掃、社会福祉、清掃関連サービス、介護・家事)における就業が許可された。さらに2004年には雇用許可制度が、2007年には訪問就業制度が導入された。雇用許可制度は、政府(雇用労働部)が「国内で労働力を調達できない企業

に対し、適正規模の外国人労働者（非熟練労働者）を合法的に雇用することを許可する制度である。二国間協定を締結した国（現在16カ国）の外国人を対象とする一般雇用許可制（E-9：非専門就業）と、韓国系外国人（在外同胞）を対象とする特例雇用許可制（H2：訪問就業）がある。就業許可期間は3年、最長で9年8カ月である。雇用許可制度は基本的に労働市場を補完し、外国人労働者の定住を認めない短期循環の制度であるが、雇用のプロセスを透明化し、外国人労働者を均等に待遇することを目指している。雇用許可制度を利用して現在韓国内で働いている外国人労働者は51,365人（2019）であり、上位5カ国（括弧内：人数）はカンボジア（7,773）、ネパール（7,088）、ベトナム（6,471）、インドネシア（6,202）、タイ（5,236）の順^{9）}となっている。非熟練労働者のほかに外国人の高度人材（専門人材）、結婚移民者、留学生などを含めて、2019年現在韓国には252万4,656人の外国人が住んでいる。なかでも結婚移民女性の急増は韓国の家族関係に大きな影響を与えかねない事案であり、次節で詳しく述べることにする。一般的に外国人住民が人口の5%を超えると多文化・多民族社会とみなされることから、韓国はまさに多文化社会の入り口に立っているといえる。このように在留外国人が増加するにつれ、在韓外国人処遇基本法（2007）、多文化家族支援法（2008）が制定され、さらに高度外国人材向けにポイント制による居住・永住資格を付与する制度（2010）が導入された。このうち多文化家族支援法については第2章で述べる。

2. 増加する結婚移民者

韓国において国際結婚は長い間、韓国女性と外国人（主に米軍）男性との結婚が主流であった。しかし、1980年代末からは統一教の布教活動により、韓国の農村の男性と比較的学歴の高い日本の女性との結婚

が増加し、さらに1992年韓中国交正常化を機に、韓国男性と韓国系（いわゆる朝鮮族）中国人の女性との結婚が激増した。その後、ベトナム、フィリピン、タイなどの東南アジアの国々や中央アジア、ロシア、モンゴルなどの女性たちが結婚移民者として増え始めた。1990年代なかば以降は再婚男性の配偶者としても外国人女性が入国するようになった。2019年の韓国人と外国人カップルの婚姻総数は23,600件で、総婚姻239,200件の9.9%を占めている。そのうち、韓国男性と外国人女性との結婚が7.4%、韓国女性と外国人男性との結婚が2.5%を占めている。10%に近い国際結婚率は、東アジアの中では台湾に次いで高い比率である。現在、韓国の市邑面（市町村）には国際結婚カップルがいないところはないといっても過言ではない。

図1にみるように、2005年をピークに男女ともに国際結婚の件数は減少し続けているが、韓国男性と外国人女性との結婚は2018年から再び増加している。外国人との結婚が減少したのは、就業を目的とした偽装結婚の取り締まりが強化されたこと、結婚仲介業に対する管理が整備されたこと、さらに韓国での国際結婚の実態が知られるようになったことに起因している。

表1にみるように、結婚移民女性のなかでもっとも多いのは2015年以降はベトナム人である。それまでは韓国系中国人が首位であったが、前述のように偽装結婚の取り締まりの強化、韓国社会への適応に対する懸念などによりその数は年々減少傾向にある。現在韓国で外国人の嫁として好まれるのはベトナムの女性である。その理由は、韓国と同じくベトナムが儒教的価値観をもった社会であり、そうした社会で生まれ育った女性は親の教えに従順であり、結婚後は夫や婚家に尽くすだろうと思われるからである（これは多分に斡旋業者による作られたイメージと宣伝との指摘がある）。またベトナム人の外見が比較的東アジアの

図1 韓国の国際結婚の推移（1999～2019）
件数（単位：千）



出所：韓国統計庁2020の資料をもとに作成

女性に似ているという面も影響しているといえよう。

一方、なぜベトナムなど新興国の女性たちは、これほど国際結婚を望んでいるのだろうか。

それは国際結婚を作り出すメカニズムから考えることができる。今日経済的に豊かな欧米やアジアの国々は少子高齢化の課題に直面しており、移民や移住労働者の受け入れなどでその問題を解決しようとしている。父系社会の韓国の場合、男児優先の価値観から出生時の性比差が大きく、このことによる結婚適齢期人口の性比の不均衡¹⁰⁾、都市への人口移動による地域間未婚人

口の性比の不均衡、さらに男女の未婚・晩婚などによる婚姻市場の不均衡がおきている。こうした状況下において、低学歴・低収入、農林漁業・第2次産業の従事者の場合、韓国人の女性と結婚するのがかなり難しく、自ずと未婚化・晩婚化が進んでしまうのである。その結果、結婚相手を国外（主に新興国）に求めるようになる。多くの地方自治体も地域の男性たちの嫁探しのために支援制度を設け、結婚が成立した場合、財政的援助を行っている。一方、世界では女性の貧困化が問題視されており、アジアの女性たちも貧困から逃れるために家事労働者や結婚移住者としてアジア域内を移住する傾向がますます顕著になっている。このような南北型の国際結婚の場合、夫の協力で、または自ら働いて貧しい実家へ送金をすることが多いのである。実家への送金は経済的な援助という意味をもつだけでなく、娘（とくに長女）と母親との関係が密なベトナム、カンボジア、フィリピンなどの社会においては実家の家族とのつながりを担保するものでもある。事実、アジアの男性と国際結婚をしたベトナム女性の多くは、ベトナムの中でもっとも貧しい地域の一つとされるメコンデルタ流域の農村地

表1 韓国人男性＝外国女性の結婚件数上位5か国（2009-2019）

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	割合
	韓国男+外国女	25,142	26,274	22,265	20,637	18,307	16,152	14,677	14,822	14,869	16,608	
A	7,249	9,623	7,636	6,586	5,770	4,743	4,651	5,377	5,364	6,338	6,712	37.9
B	11,364	9,623	7,549	7,036	6,058	5,485	4,545	4,198	3,880	3,671	3,649	20.6
C	496	438	354	323	291	439	543	720	1,017	1,560	2,050	11.6
D	1,140	1,193	1,124	1,309	1,218	1,345	1,030	838	843	987	903	5.1
E	1,643	1,906	2,072	2,216	1,692	1,130	1,006	864	842	852	816	4.6

・A：ベトナム、B：中国、C：タイ、D：日本、E：フィリピン

・出所：韓国統計庁 2020

区の出身である。『列伝』で取り上げられているフィリピンからの移住女性も、都市部のスラム街や山岳地域の出身が多数いた。ベトナム女性の場合、最初は台湾の男性との国際結婚が多かったが、ベトナム女性への虐待など人権問題が知られるようになり、台湾政府による国際結婚の管理が強化されたため、韓流ブームも手伝って韓国の男性との結婚に舵をきったのである。こうした南北型の国際結婚は、状況が変わればまた新たな相手を探し求めて移住する可能性がある。

3. 先行研究

本節では、本論の研究対象である結婚移住者および多文化家庭に関する先行研究を中心にみていきたい。ここ20年余りの間、韓国の結婚移住者および多文化家庭についての調査・研究は多数存在する。内容別にみると、①結婚移住者および多文化家庭の実態調査・研究、②結婚移住者および多文化家庭が抱えている諸問題や当事者のメンタルヘルス、③結婚移住者および多文化家庭の社会統合・支援策、④結婚移住者に対する地域社会の受け入れの問題の、大きく四つの分野に分けることができよう。①の主に社会学者による結婚移住者および多文化家庭への実態調査は結婚移住者が急増した2000年代に集中的に行われている。これらの調査研究は、初期の多文化家庭の生活実態を把握し、行政レベルでの支援策を模索するために、主に政府機関や自治体の依頼で行われたものが多い。たとえば、農村地域の多文化家庭に対する支援を提言したもの [이순형ほか 2006]、中央政府のレベルで多文化家族への中長期支援を策定するための全国的な基本情報を提供したものの [설동훈ほか 2006]、京畿道の多文化家族の生活実態と支援を分析したもの [정기선ほか 2007]、慶尚北道の多文化家族の生活実態と社会統合の可能性を模索したもの [정일선 2006] などがある。現在中央政府

の各省庁や自治体で実施している結婚移住者および多文化家庭への支援プログラムはこうした研究を参考にしているものが多い [양애경ほか 2007: 40—41]。②の結婚移住者および多文化家庭が抱えている諸問題や当事者のメンタルヘルスに関する研究は、韓国文化への適応の問題や家庭・社会で経験する様々な葛藤、ストレス、コミュニケーション問題、貧困問題、子育て・教育問題、子どものアイデンティティなど (김민정ほか2006、김오남2006、김이선ほか 2006、정은희 2004、尹靖水ほか 2012、윤형숙 2004a、이혜경 2005、전경수 2008、조영달 2006、한국염 2004、한건수 2006)、多岐にわたっている。多文化家庭に生まれた子どもたちが学校教育を受ける年齢になると、子どものアイデンティティや文化化、教育問題に関する研究が目立つようになっている。質問紙調査による数値的な実態だけでは結婚移住女性が抱えている家庭内のデリケートな人間関係によるさまざまな葛藤や精神的なストレスまでは把握しきれないところがあるのも事実である。そういった意味で、上記の文化人類学的研究を含めた多くの研究は、多文化家族が抱えている問題をより深く掘り下げているといえよう。

現在韓国では、多文化家族を対象にした公的支援制度がかなり充実しているといわれるが、③のこうした支援制度の問題点についての指摘もある [金愛慶ほか 2016、佐々木祐 2019]。結婚移住者たちが韓国社会にスムーズに統合していけるように地域社会ごとに様々な多文化教育プログラムが開発運営されている。一方、④のような結婚移住女性に対する地域社会の受け入れの現状を、政策担当者、ボランティア、地域住民へのインタビューを通じてまとめた文献 [양애경ほか 2007] は、韓国人の多文化共生への認識を知ることができる貴重なものといえよう。

日本は韓国より先に南北型の国際結婚がはじまっており、韓国の国際結婚の実態と

類似した側面がある。最近は韓国・日本・台湾・中国における国際結婚と移住者に対する比較研究〔藤井勝ほか 2019〕も刊行され、国際結婚という切口で東アジアにおける「地方的世界」の実態を描き出している。いずれ南北型の国際結婚が状況次第で新たな嫁ぎ先を求めていくことも予想されていることを考えると、複数国間の比較研究は結婚移住の今後の動向を概観・分析する上で必要となってくるであろう。

この20年余りの間に、韓国の行政機関（女性家族部）による実態調査や多岐にわたる研究の蓄積により、結婚移住者や多文化家庭の実態および課題が明確にされ、経年による変化も追跡できるようになっている。またそれらを踏まえて行政や民間レベルによる支援制度も課題を抱えながら運営されている。今後は、多文化家庭の子どもたちの言語習得の問題や学習一般、文化化・社会化についての充実した調査・研究も期待したい。さらに、こうした数値が示す多文化社会の到来を目の当たりにして、韓国人一人ひとりがどう多文化社会を認識し、向き合っていくのかについての研究も引き続き必要であろう。

II 多文化家族のための支援制度

1. 多文化家庭が抱える諸問題

多文化家庭の抱える問題についてはすでに多くの調査・研究において指摘されている。結婚移住者およびその家族の主な問題として、意思疎通、家庭内暴力、家族間不和、貧困と就労、子どもの教育、差別と偏見などが挙げられる。仲介業者を通じて結婚をした移住女性のほとんどは韓国語を学ぶ機会を持たずに来韓し、すぐに出産と子育てをすることになり、十分な韓国語を習得する時間的余裕がないことが多い。後述する多文化家族支援センターで韓国語を学ぶことができるが、子どもをつれて通うのもなかなか困難であり、また夫の家族が嫁の外

出を快く思わないこともある。日常会話は時間が経つにつれて大体できるようになるが、結婚移住者にとって社会生活や就労のために必要とされる一定のレベル以上の韓国語を習得するのはそう簡単ではないようである。2018年に実施された「多文化家族実態調査」によると、配偶者との意思疎通に困難を感じる人は21%を占めており2015年の調査結果とほぼ同じである。学歴別では学歴が低いほどその割合が高く、出身国別ではベトナム、タイ、カンボジア、フィリピンなど東南アジア出身者が多かった〔女性家族部 2019〕。子どもに母親の母語で話かけることを快く思わない家族もあり、母と子との間に意思疎通がうまくできず母子関係に影響を与えたり、言語習得に遅れがみられるという報告もある〔조영달 2006〕。上記の女性家族部の実態調査によると、日ごろ母親と全くコミュニケーションをとっていない多文化家庭の青少年が10.1%に上る。2018年の実態調査によると、夫婦関係について大変満足が53.6%、ある程度満足が26.8%で80%超の人が夫婦関係に満足していると答えている（これは韓国人夫婦の満足度より高い）。しかし、一方では夫の暴力や夫の家族との葛藤も深刻である。言葉の問題や夫婦の年齢の差などによるコミュニケーションの不足¹¹⁾、夫の家父長的な考えと態度、性格の違い¹²⁾などが不和の原因のようである。夫の暴力や虐待により命を落とす結婚移住女性もおり、行政機関や人権団体などもその対策に苦心している。

2019年国際結婚カップルの離婚率は韓国の総離婚件数の6.2%を占めている〔韓国統計庁 2019〕。その内訳は韓国人夫＝外国人妻が4.4%、外国人夫＝韓国人妻が1.8%であり、どちらも中国人が占める割合がもっとも高い。外国人配偶者との離婚は年々減少してはいるが依然高いレベルである。離婚の理由としては韓国人夫＝外国人妻は性格の違いがもっとも多く、次いで配偶者の浮気、家族間の葛藤、経済的問題、虐待の

順になっており、外国人夫＝韓国人妻も性格の違いがトップになっている〔韓国統計庁 2017〕。子どもの学習は、韓国語にほとんど問題がない中国人（韓国系を含む）の母親は自らみてあげることが多いが、ほかの外国人の母親の場合は大体夫がみている。父親がみてあげられない場合は、多文化家族支援センターの訪問教師にきてもらう家庭もある。新興国の女性と結婚した韓国の男性はそもそも農村の居住者、都市部の工場労働者が多く、経済的に困難な多文化家庭も多い¹³⁾。また夫との年齢差が大きく、近い将来（またはすでに）夫に代わって妻が生計を担わなければならないことが予想される。そのためにも彼女たちが職業訓練を受け、より良い収入が得られる仕事に就くことが必要だが¹⁴⁾、農村部では未だ嫁が外で働くのを快く思わない家庭も多く、葛藤の原因になっている。結婚移住女性たちが自立できるように支援することはもちろん、22万人超の多文化家庭の子どもたちがより良い環境で教育を受け、自ら望む進路へ進み、社会の一員としてまた良き納税者として共に生きていけるようサポートすることこそが多文化共生社会であり、また高齢化社会に備えることであろう。

2. 多文化家族への支援制度と課題

現在韓国では、急増した結婚移住者とその家族で構成される多文化家族を支援するための法・制度が整備されており、その運営のために全国に多文化家族支援センター（国・地方自治体の下部組織）が設置されさまざまな実践を行っている。この事業は中央行政機関の女性家族部（The Ministry of Gender Equality and Family）の管轄である。紙面の関係上、この節ではここに至るまでの詳細な経緯は省略し、根幹となる制度および支援活動を中心に述べる。多文化家族法が制定されたのは2008年である。それに伴い「多文化家族基本計画」が策定され（5年ごとに見直される）、2019

年現在第3次基本計画が実施中である。第1次多文化家族基本計画（2008～2012）では、多文化家族の生活の質と向上および定着のための支援、多文化家族の子供に対する支援の強化およびグローバル人材の育成を目標に掲げている〔金愛慶 2016：11〕。これらは、また、国際結婚仲介の管理、結婚の真偽を確かめるための入国前の検証制度の強化を含めた具体的な政策課題を策定している。第2次基本計画（2013～2017）は、第1次基本計画に対する種々の批判や、多文化家族が増加するにつれ家族間の葛藤や離婚が増えていること、子供たちの成長に合わせた支援が必要となってきたことなど、多文化家族を取り巻く状況の変化を踏まえ新たな政策課題が出された〔金愛慶 2016：118〕。多文化支援センターの運営予算は、ソウル市は市と国が半分ずつ、農村地域では国が70%、地方自治体が30%を負担する〔佐々木祐 2019：174〕。

各地域の多文化家族支援センターでは、多文化家族支援法および多文化家族基本計画に基づき事業を行っているが、それぞれのセンターが独自のプログラムを工夫して実践したり、関連機関・団体との業務連携も行っている。2010年に筆者はスタートして間もない慶尚北道内陸部にあるY郡の多文化家族支援センターを訪れ聞き取り調査を行ったことがあるが、地元ではちょうど秋の農産物のバザーが開かれており、ベトナムの結婚移住女性たちが特設のブースでベトナム料理をつくって販売していた。当時この田舎町に結婚移住女性が大勢いたこと、ベトナムの女性たちが楽しく母国の料理をつくり地域の人たちと交流していたことに驚いたことを今でも覚えている。

支援センターの主な支援内容としては、韓国語学習、韓国文化の教育、子育ての相談と支援、多文化家庭への訪問サービス（韓国語学習など）、就労支援（語学教育、パソコン教育、基礎職能教育など）がある。結婚移住女性の多くが就業を望んでおり、

外国人向けの求人情報を得て通訳・翻訳の仕事、製造業やサービス業で働いている人も多い。さらに、多文化家族に対する認識の改善のために、彼らがともに生きる地域の住民として受け入れてもらえるよう、移住女性の地域社会でのボランティア活動にも力を入れているセンターもある。支援活動は多文化家族の経年による状況変化に合わせ、実態調査を踏まえて見直されている。

こうした行政機関による支援のほかに、移住女性や外国人労働者のための人権センターや福祉関係の法人も多数あり、夫のDVに苦しむ女性を保護するためのシェルターの運営や離婚問題などの相談を行っている。

韓国の多文化家族支援法の主旨や支援センターの活動内容は、多文化家族の韓国文化・社会への同化に偏りすぎているとの批判を受け続けている。また第2次外国人対策基本計画（2013～2018）において、外国人労働者への支援予算（15％）に比べて、多文化家族対策に割かれた費用（85％）が多すぎるとの批判もある〔佐々木祐2019：177〕。こうした批判を受け、韓国文化のみならず結婚移住者が自文化を紹介するプログラムを通じて地域住民との交流ができるようにしている。また多文化家族への無償援助を減らし、所得別受益者負担を設定した事業もある。韓国政府は、2018年3月に第3次外国人政策基本計画を発表し、改革の方向性を示している。第1次・第2次計画に比べ外国人の権利強化や自立の視点を打ち出すなど、より国民の理解と社会統合を意識した内容となっている。韓国における多文化共生時代は始まったばかりだが、今後どのように共生していくのか、そのあり方を模索する本格的な議論が必要であろう。

Ⅲ 多文化家族における葛藤と相互理解：EBSの『多文化夫婦列伝』を事例に

1. ノンフィクション番組『多文化夫婦列伝』

『列伝』は、韓国教育放送で毎週木曜日22時45分～23時35分（再放送：月曜日13：55～14：45、金曜日19：45～20：35）に放送される50分の番組である。2013年10月18日に第1回が放送され、現在まで8年近く続いている長寿番組である。出演は番組のホームページを通じて申請することができる。

番組のホームページによると、企画の主旨は「韓国に嫁にきた外国人女性と、外国人女性を嫁に迎え入れた姑が、『家族の幸福』という共通の目標のために葛藤を乗り越え、互いを理解し、一つの家族として生まれ変わる過程を描くこと」（要点のみ）とある。つまり、この番組は、生まれ育った環境も文化も異なる嫁（婦）と姑が、生活を共にすることで直面するさまざまな問題を解決していこうと努力する過程を通じて、互いに理解を深めていく姿を映像に収めたものなのである。女性の結婚移住者が増え続けるなか、結婚移住者を迎え入れた多文化家庭の抱える問題や努力を、映像を通じてより多くの人々に知ってもらうことが狙いのようなのである。こうした番組の制作の意図は作り方がオールロケということによりリアルに伝わってくる。

『列伝』は2部構成でできている。まず前半では、嫁と姑が同居している家庭（別居の場合はそれぞれの家庭）のなかでの二人の日常生活、会話などをそのままみせている。映像の中にはほかの家族構成員（夫、子ども、舅、兄弟など）もしばしば登場し、話をする。そして後半では、嫁と姑（時々夫と舅も同行）が嫁の故郷を訪ね、一週間嫁の実家に滞在しながら現地の文化を体験するとともに、嫁と姑が対話を重ね互いを理解していくという進行となっている。前半で激しくぶつ

かり合っていた嫁と姑の映像をみせられた者としては、1週間の滞在でそう簡単に二人が理解しあえるのかどうか若干疑問ではあるが、少なくともその家族や嫁と姑の抱える問題は明白に伝わってきたといえよう。作り手による過度な演出は感じられず、また登場人物が普段と変わらないような動きや態度をみせており、その家庭内で起きている葛藤の所在を感じ取ることができるのである。それは、出演者たちが収録前に制作側から番組の主旨や撮影に臨む際の心構えのようなものについて説明を受け、カメラに慣れ、本音を隠すことなく、飾ることなく日常生活を見せたからではないだろうか。加えて、普段から自分の意見をはっきり、また正直にいうことが多い韓国の中高年の女性たちが、カメラの前で委縮せずに普段通りに振る舞ったことも功を奏しているといえよう。

韓国において嫁と姑はたいへん難しい関係であり、その難しさを表す「姑婦問題：고부문제」あるいは「嫁姑間の葛藤：고부갈등」といったタームが存在するほどである。韓国人同士でもなかなか難しい関係なのに、外国人の嫁ならなおさらであろう。『列伝』は、外国人の嫁を通して韓国における姑や嫁の位置づけを再認識でき、また外国人の嫁にとって異文化の受容とはなんなのかを考えさせてくれる番組となっている。

2. 家族間の葛藤と相互理解のハードル

(1) 出演者の出身国と年齢

これまで放送された『列伝』は300本を超えているが、ここでは2013年から2019年までの292本を資料として用いる¹⁵⁾。まずこの番組に出演した人々の基本情報を整理しておきたい。この期間中に出演した結婚移住者の出身国は図2の通りである。

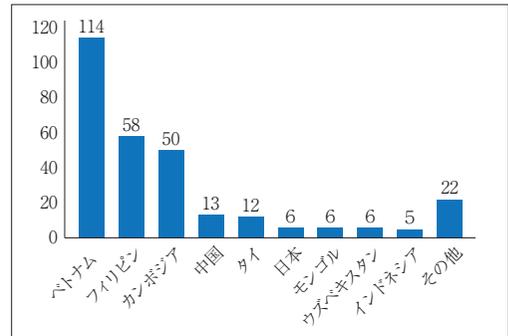
『列伝』の出演者のなかでもっとも多いのは39%を占めるベトナムの女性である。続いてフィリピン人が19.9%、カンボジア人が17.1%、中国人が4.5%、タイ人が4.1%

の順になっている。東南アジア出身者が全体の83.6%（その他を含めて244人）を占めている。

表2にみるように、『列伝』の出演者夫婦の結婚期間は、4～6年が30.8%ともっとも多い。結婚期間がもっとも短かったのは5か月（2人）で、もっとも長かったのは25年（1人）である。韓国の男性と結婚し韓国で暮らしている結婚移住者たちは、滞在期間が長くなるにつれ、韓国社会や文化に馴染み、また夫の家族とのより深い相互理解ができてきているのだろうか。こういった点についてはのちに考察したい。

つぎに、出演者の夫と妻の年齢を図3で

図2 出身国別出演者数（2013—2019）n：292



・その他：バングラデシュ、ミャンマ、ラオス、ネパール、インド、キルギスタン、ポーランド、ロシア、スコットランド、ドイツ、ブラジル、メキシコ、ペルー、トルコ

表2 出演夫婦の結婚期間（放送時）

	3年以下	4～6年	7～9年	10～14年	15～19年	20年以上
実数(人)	51	90	49	49	18	5
割合(%)	17.5	30.8	16.8	16.8	6.2	1.7

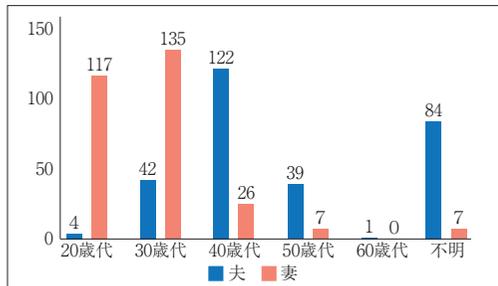
確認すると、夫は40歳代（41.8%）が、妻は30歳代（46.2%）がもっとも多い。韓国における南北型の国際結婚の特徴の一つに夫婦間の年の差が大きいことが挙げられる。図3においても、50歳代の夫が13.4%、20歳代の妻が40%あり、ある程度夫婦の年齢の差があることを示している。実際出演者の夫婦の中には10歳以上離れたひとも多く、

もっとも年が離れた夫婦は24歳の差があった。40歳代以上の夫が55.5%もいるということは、姑の年齢もそれ相応に高いということである。図4の出演者の姑の年齢をみると70歳代が44.5%ともっとも多い。70歳代と80歳代を合わせると全体の58.2%を占めている。これは、結婚移住女性の半数以上が、70、80歳代の姑と日々生活を共にしていることを意味しているのである。なかには彼女たちの祖父母よりも年齢が上の姑もおり、姑にとっては嫁というより孫娘に近い年代なのである。このような年齢構成が家族間の相互理解のハードルの一つになっているといえよう。

(2) 嫁と姑の不協和音

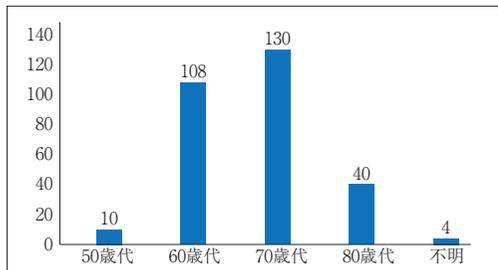
『列伝』に登場する家族は数例を除き、番組のタイトルに相応しく、嫁と姑との間に様々な葛藤を抱えている。結婚移住者の夫婦間の問題（夫の暴力・酒癖、低収入、年齢の差、無理解など）についてはすでに述べたが、夫の親（とくに姑）との関係に

図3 出演者の夫婦の年齢と人数（放送時） n：292



*不明：年齢に関する情報なし

図4 出演者の姑の年齢と人数（放送時） n：292



・不明：年齢に関する情報なし

焦点を当てた調査研究は少ない。同居の有無にかかわらず、伝統的に息子（多くの場合長男）が年老いた親の面倒をみることを義務であり美德とする韓国の儒教文化において、嫁と姑の関係は家庭の平和を握るカギともいえよう。番組をみる限り、多文化家庭において多くの嫁がもっとも長い時間を一緒に過ごすのが姑であることを考えると、『列伝』が嫁と姑に焦点を当て多文化家庭の親子関係を照明しようとしたのは意義ある企画のように思う。

番組は、前半では日常生活における嫁と姑との葛藤やぶつかり合いをそのまま映しており、その家族の人間関係における問題の所在がわかるような作りになっている。ここでは、『列伝』の292話で取り上げられた内容をまとめ、嫁・姑間の葛藤や摩擦をタイプ別に分けてみていくことにする。嫁・姑間の葛藤は大きく①ジェンダー平等・男女の役割をめぐる問題、②適応をめぐる問題、③コミュニケーションをめぐる問題の三つに分けることができる。この三つの問題は、基本的に文化の違いや個人のライフストーリーに起因するものであるが、順番に詳しくみていくことにしよう。

①ジェンダー平等・男女の役割をめぐる問題

嫁として韓国の家庭に入り姑と生活をすようになった移住者の女性たちがまず驚くのは、男女の役割の違いである。『列伝』のなかの多くの姑は、自分の息子が嫁を手伝って家事をするのを快く思っておらず、家事は女性の仕事だと強調するのである¹⁶⁾。家父長制の価値観が色濃く残る韓国社会では今なお家庭や社会において男性が優位な場合が多く、親が家を継ぐ息子を大切に思い、また頼るのはよくあることである。そのため、外で活躍すべき息子が家庭内の労働かつ女性がやるべきとされる家事をやるのは我慢ならぬのであろう。こうした傾向は古い仕来りが残る農村部ほど、また年配者ほど強い。

『列伝』ではほぼ毎回のよう、姑の嫁

に対する最大の不満要素として家事のことが映し出される。嫁が家事をしっかりこなせないと思う姑は、「食器をきれいに洗いなさい、部屋の掃除をしなさい」と毎日口うるさくいう。一方嫁の方は、姑の小言(잔소리)が理解できない。自分なりに家事をやっているし、そもそも出身国(特に東南アジア)ではどちらかというと家事は男性がやることが多く、男女の仕事の違いもとくはない。なぜ韓国では家事を女性ばかりがやらなければならないのか理解に苦しむのである。姑に男性も家事をやるべきだと言っても「ここはあなたの国とは違う」という答えが返ってくるのみである。こうしたやり取りからは、嫁の文化への配慮はみられず、韓国文化の価値のみを強調しその修得へのプレッシャーをかける姑の姿を確認することができる。さらに、女性や嫁の徳目として従順さや素直さ、忍耐が求められる¹⁷⁾。番組のなかの姑たちがもっともきらうのが嫁の口答えである。嫁への不満をいうとき、必ずいう決まり文句が「口答えをする」「私が一ついうと嫁は十いう」である。嫁は姑や目上のひとに何かをいわれたときには、たとえそれに納得がいなくても「はい、わかりました(네, 알겠습니다)」といわなければならないというのである。このような価値観が今の韓国の若い女性たちに通用するとは思にくいのだが、文化が違う若い世代の外国出身の嫁も納得することがあまりないように見える。番組をみる限り、嫁はただ自分の意見をいったり起きた出来事の状態説明をしているだけなのに、それが姑にはすべて口答えと思われるようになってしまうようである。それは姑の世代(特に70、80歳代)がそのような儒教的な家庭教育を受けて育ったからかもしれない。嫁が外で働いたり、外出をするのを快く思わない姑も多い。嫁はなによりも家事と育児に専念し、働きたいのなら家の商売を手伝うべきとはっきりいう姑もいる¹⁸⁾。出演者のなかには夫の収入が少なく、妻が働かな

いと生活が厳しい人もいる。しかし、彼女たちが働くのは生活のためだけではなく、外の世界を経験し多くの人との交流を楽しみにしているためでもある。

②適応をめぐる問題

韓国の男性と結婚した移住女性のほとんどは、入国後に各地域の多文化家族支援センターで韓国語や韓国文化についてはじめて学ぶことになる。しかし、家庭の事情や交通の便などにより長期間通うことが困難な人もいる。こうした事情もあり、結婚移住女性たちは家庭生活を通じて韓国語を学び韓国文化に慣れていくのが一般的である。韓国の仕来りや礼儀作法、家事のやり方などを彼女たちに教えるのは、主に姑である。たとえば、東南アジア出身の嫁の場合、同じアジアとはいえ、韓国の言葉や文化に適応するのはそれなりに困難を伴うものようである。なかでも食事の問題は慣れるまで時間がかかり、5年以上経っても母国の料理に拘る人もいる¹⁹⁾。一方、姑たちは韓国式食事(ご飯・スープ・おかず)に固執し、朝はパンやコーヒーで済ませてしまう嫁や朝から肉を食べる嫁がなかなか理解できない。また姑たちは、嫁がつくるエスニック料理を口にすることはほとんどない。せっかく母国の料理をつくっても家族はだれも食べてくれないため、次第に作らなくなったり、台所を汚すという理由で嫁の国の油を使う料理を作らせない姑もいる。口に合わない食べ物を強制できないとはいえ、このような夫の家族の態度は、母国の文化が無視されたという思いを嫁に抱かせ、次第に家族と食卓を囲まなくなったひともある。料理だけでなく、子供が覚えたアジアの言葉を外でうっかり話せば差別を受けるかもしれないという理由で、子供に母親の母国語を教えるのを快く思わない夫の家族もいる(英語や中国語などメジャーな言語は例外)。さらに、韓国式育児様式に固執したり、「挨拶」²⁰⁾を強要する姑も多い。とくに挨拶の問題は東南アジアからきた嫁を悩

まし、夫の家族との不和をもたらす要因の一つになっている。朝起きたときや寝るとき、家を離れるとき以外はいちいち家族間で挨拶を交わす習慣がない文化のなかで暮らしてきた人にとって、家族間で頻繁に挨拶を交わしたり声をかけたりする韓国の礼儀作法はなかなか煩わしいようである。しかし、韓国では挨拶が大事だと教えても言われた通りにしない嫁は、家族、とくに目上の人にとっては礼儀知らずであり、家族への気遣いが足りないひとのように思われてしまうのである。こうした事例をみると、挨拶というのは簡単にできそうでその社会に通用する挨拶の仕方を身に着けるのは案外難しいことかもしれない。

異文化への適応のためにはある程度時間が必要であり、また適応のプロセスは人によってさまざまであろう。さらに、だれかに強制されてうまくいくものでもなく、本人の試行錯誤の末にたどり着く道といえる。異国から嫁いできた女性たちにホスト社会の文化のみを強要するのであればそれこそ彼女たちのアイデンティティを無視した同化の押しつけであろう。むろん嫁たちができるだけ早く韓国の文化や社会に馴染み幸せな家庭を築いてほしいという切なる願いからだということはわかるが、見方を変えれば、上記でみたような事例は韓国文化への同化を急いでいるようにもみえる。『列伝』の姑たちはとにかく異国の嫁たちを「教えこむ」ことに熱心である。とくに家事に関しては、ベテランの主婦らしく自らのやり方（韓国主婦の一般的なやり方）を伝授しようとする。結婚前に家事をやったことがなく、また家事自体があまり好きでないほとんどの嫁たちにとっては、姑の教えが必ずしもありがたいことではないようにみえる。実は嫁たちも自分なりの家事のやり方²¹⁾があるのだが、姑たちはそのやり方が気に入らず、自分のやり方に従わせようとする。嫁がそれに従わないと大きい声で詰め寄ることもあり、さらに嫁の反感を買

うといった悪循環が多く事例においてみられた。このような姑の態度からは、一昔前の嫁の役割、つまり家事・農作業をこなし、跡継ぎの子どもを育て、親の世話をするといった部分がとりわけ強調され、一人の女性として嫁がどのような環境で育ち、どのような考え方の持ち主なのかについてはあまり関心がないことが垣間見られる。暑い国で生まれ育った嫁がなぜ動作がゆっくりで²²⁾、韓国の主婦のように早く家事ができないのか、また田舎の生活で彼女たちがどれほど孤独なのかについて姑たちは知ろうとしない。韓国人の嫁なら一日も耐えられないだろうと話す外国人の嫁²³⁾にとって、自分のことをわかってくれない姑との同居は大きなストレスであるに違いない。『列伝』のなかの嫁たちが最も頻繁に使う韓国語は「짜증나다 (チャジュンナダ：いらだつ)」「속상하다 (ソクサンハダ：腹が立つ)」「답답하다 (タプタパダ：ストレスが溜まる)」「마음이 아프다 (マウミアプダ：つらい)」「기분 나쁘다 (キブンナプダ：気分が悪い)」であり、一方、姑の口癖は「속터진다 (ソクトジンダ：我慢ならない)」「답답하다 (タプタパダ：ストレスが溜まる)」「가르쳐야 한다 (カルチョヤハンダ：教えなくてはいけない)」「고집세다 (ゴジプセダ：意地を張る)」「제 멋대로 한다 (チェモッテロハンダ：自分勝手だ)」である。これらの言葉は、両者の気持ちや立場を表している。韓国のことについてなにも知らない嫁を教えなくてはという姑の使命感は、しばしば息子夫婦への過度な干渉へと発展していく。夫婦喧嘩、嫁の外出、買い物、服装など、あらゆることに干渉をし、また小言をいう。家族としての関心事だからと思えなくもないが、嫁がそれを干渉だと思い、強いストレスを感じていることが問題である。嫁にストレスを与えるもう一つの問題は、姑の節約精神である。ものを捨てられず、極端に節約したがる姑のやり方は、豊かさを求めて嫁いできた若い嫁た

ちにはストレス意外のなにもものでもないようである。朝鮮戦争を経験し、貧しかった時代を生き抜いてきた70、80歳代の姑たちが物を大切に節約を心がけることは理解はできるが、姑の昔話に共感する嫁は少ない。家族や近隣の人々に対する否定的感情と経済的逼迫感が韓国の多文化家族の妻の精神的健康に強い影響を与えているという研究報告もある〔尹靖水ほか 2012：23〕。

③コミュニケーションをめぐる問題

『列伝』の姑たちのなかには大声・早口で話すひとが多い。しかも地域特有の方言を使うため、姑の話を外国出身の嫁が百パーセント理解するのは難しい。そのせいか、嫁たちは口々に姑が怖いと言っている。家事を教えるときも他愛のない話をするときも姑の話し方が優しくないため、いつも怒っているようにみえるし、文句や小言を言われているように感じるらしい。嫁に何かを教えるときに教わる側が理解しそのようにやってみたいと思えるような教え方というより、命令調だったり失敗を叱りつけるようなタイプの姑が番組では多く紹介されている。そのような姑に対して韓国語がまだ十分ではない嫁が不満をいうのは難しく、また意見を言ったら言ったで「わがまま」で「姑の話に従わない」「気に入らない」嫁といわれてしまう。このようなことが繰り返されると嫁は自分が愛されていないと思ひ、それ以上姑と話をする気にならず心を閉ざしてしまうのである。嫁・姑が必要最小限の会話のみで日々を過ごしている事例が実に多かった。番組をみる限り、姑たちが嫁を大切に思っていないわけではないのだが、コミュニケーションがなかなかうまくとれない。祖父母と孫娘ほど年が離れた嫁と姑の間に共通の話題が必ずしも多くはないかもしれないが、互いの理解と平穏な生活のためにコミュニケーションを諦めてはならないだろう。実際に『列伝』では夫の家族と十分にコミュニケーションがとれ、また家族に大事にされている多文化家

族の嫁ほど韓国語が上達し韓国文化への適応も早いという事例が紹介されている²⁴⁾。

3. 嫁と姑のそれぞれの理解の形

これまでみてきたように、『列伝』に紹介された嫁（特に東南アジア出身）と姑の互いへの望みは、

嫁の望み = 外国出身の嫁の文化を理解し、家族としてまずは愛してほしい→そうすると、自分も時間をかけて韓国の文化・社会を理解し、家族とうまくやっている

姑の望み = まず嫁としての役割を果たしてほしい→そうすると、家族として嫁を信頼でき、大切にできる

と整理できよう。どちらの望みもゴールは二人の女性が同じ家族として仲良くなって幸せな生活を送ることだろう。しかし、そこに辿り着くプロセスにおいて、嫁の方は「愛」と「配慮」を、姑の方は「役割」と「責任」を最優先順位と考えており、大きく異なっている。嫁のいう「愛」とは、未熟な嫁の失敗や甘えを叱る代わりに暖かく見守ってほしいということであろう。それはほかの社会や文化がそうであるように、彼女たちが生まれ育った文化において家族とはそのような存在なのである。そのため、姑に叱られると姑が自分の事を好きでないのではないかと、愛していないのではないかと、心が離れてしまうのである。しかし現実ではその「愛」はなかなか姑には理解されず、嫁としての役割を重んじる姑との不和が絶えないのである。結婚してかなり年月が経っているにもかかわらず、自分の役割を考えずいつまでも姑や家族に甘えてばかりの嫁の事例をみると、一方的に姑が我慢すべきとも言いにくい。『列伝』はまさにこのようなジレンマの解決の糸口を探るためにつくられた番組だといえる。

『列伝』の第2部では、葛藤を抱えたまま嫁と姑が嫁の実家を訪ね、一週間程度一緒に過ごす様子を紹介している。嫁の家族の歓待を受け、姑が慣れない環境のなかで

自然と嫁に頼りながら過ごす姿は韓国での立場とは真逆である。嫁が通訳をしてくれないとだれとも話が通じず、また香草を使った現地のご馳走が口に合わず食べられない日が続き、はじめて韓国での嫁の大変さやつらさが姑には少し理解できるようなのである。一方、嫁の方は久しぶりの里帰りであるで別人のように明るくなり、率先して家の仕事をこなしている。またたいはいいやな顔をせず自ら進んで姑の世話をする。初めてみるこのような嫁の姿に姑は驚きを隠せないと同時に、嫁が思っていたほど未熟ではなく、実は結構仕事ができる女性だと思えるようになるのである。さらに、嫁の家族から、貧しい家庭に生まれ幼いころから嫁が市場で野菜や果物を売ったり、裁縫の仕事をして家族を助けたという話をきき、嫁も自分と同じく苦勞してきたということにはじめて強く共感をする。その後、嫁と姑は近くの名所を観光しながら（これは番組の演出だと思うが）これまでの二人の関係を振り返り、互いへの不満などについて率直に話し合い、これからは理解し合うために努力していくことを約束するのである。二人の間の長年の葛藤がこれですぐに解決できるとは考えにくい、嫁の本来の姿を知り、また結婚前の嫁の苦勞話に姑の人生を重ね合わせてはじめて嫁に対する気持ちに変化が生じたことで、二人の今後の関係に変化をもたらすことが期待される。

4. テレビ番組がもたらす効果

教育放送が制作した『列伝』は多文化家族をテーマにしたほかのテレビ番組とは作り方が異なっている。視聴率を意識した興味本位の内容や構成ではなく、多文化家族の日常生活に密着し、葛藤や韓国の高齢化の状況を過度な演出や編集をせずに淡々と映し出しているのは公共放送ならではの作りといえよう。とくに番組の後半において嫁と姑が嫁の実家に滞在し、話し合う時間をもつというコンセプトは示唆するところ

が多い。こうした試みは当事者たちには新しい体験を、また視聴者には新鮮な興味を与えるという意味において大きな効果をもたらしている。番組に登場するほとんどの姑たちは海外旅行がはじめてであり、また嫁の両親とも初対面である。嫁の実家までの道のりは平坦ではなく、長時間の旅は高齢者の姑たちにはかなり堪える。慣れない環境での1週間の滞在は姑たちにとって忍耐を要するフィールドワークのようなものだったのではないだろうか。言葉は通じないが家の中を見て回り、また家族の仕事を観察し、ときには参加をする。さらに村の畑、ゴム園、果樹園、エビの養殖場などを訪ね、ゴムを採取したり、果物を収穫する体験をし、市場でとってきた野菜や果物を嫁と一緒に売りながら嫁の幼少期の苦勞話をきく。こうした体験を通じて現地の人々がどのように働き、嫁が家族の中でどのような存在なのかを少しずつ理解していく。生まれてからずっと同じ地域で生きてきた姑たちにとって、自然環境も働き方も考え方も異なる世界を、短い期間ではあるが観光ではなく生活を共にしながら体験するということは大きな出来事だったに違いない。これこそ「百聞は一見に如かず」であり、嫁との関係を振り返り考え直すきっかけを提供しているのである。番組に出演した嫁と姑の関係がその後どのように変化しているのか、嫁の実家で二人が誓い合ったように互いを理解し仲のいい家族をつくることができているのか、ぜひその続編をみてみたい。

おわりに：多文化共生への第一歩

韓国の女性家族部は、多文化家族支援法第4条に基づき2012年から3年ごとに「国民多文化受容性調査」を実施している。調査目的は、「性別、年齢、教育レベル、所得レベルなどによる一般国民の多文化への受容度を把握し、多文化関連政策の基礎資料として活用するため」である（女性家族

部 2018)。調査項目は、多文化への志向と受容、自民族志向、多文化受容の限界などを含め多岐にわたっている。最新の2018年の実態調査²⁵⁾によると、多文化教育への参加経験者は4.6%、多文化活動への参加経験者は6.2%とどちらもかなり低い水準である。「外国人は韓国在留中に母国の伝統的生活習慣を諦めるべきか」との質問に対して、30.3%（そう思う：26.6%、とてもそう思う：3.7%）がそう思うと答えており、2015年（26.0%）と2012年（24.4%）に比べて次第に高くなっている。一方、そう思わないと答えた比率は34.8%で、2015年（42%）、2012年（39.9%）より低くなっている。この結果が、実施年度別調査対象が異なったことによるものなのかどうかはわからないが、多文化の受容の面から考えると気になる現象といえよう。「単一民族の血統を維持するのは誇らしいことと思うか」との質問には、46.5%（そう思う38.6%、とてもそう思う7.9%）が「そう思う」と答えており、「そう思わない」と答えたひとは17.6%に留まっている。さらに、「違う人種、宗教、文化をもつ人々を受け入れることには限界があるか」との質問には、52.4%が「ある」と答えており、2015年（55.3%）よりは減っているものの、2012年（39.4%）よりは大幅に増加している。一方、「ない」と答えた人は13.2%で2015年（12.1%）とあまり変わらない。紙面の関係上調査結果の全容を紹介することはできないが、外国人労働者の権利保障や永住権・国籍取得の質問には肯定的な回答の割合がかなり高い半面、「民族」や文化の問題に関してはまだまだ受容度が低いことが実態調査の結果から浮かび上がっている。長年同質の文化を有する者同士で暮らしてきた結果、異なる文化をもつ他者に対する排除の心理が形成されたのであろう。これまでみてきた『列伝』の家族たちがまさにその最たる例といえよう。外国人の嫁を迎えることでどのようなことが起こり、また

どのような意識や準備が必要なのかをじっくり考える余裕もなく迎え入れてしまっているのである。とりあえず来てもらって姑の自分がしっかり教えれば何とかなるだろうと思っていたのかもしれない。しかし、『列伝』や多数の研究報告をみる限り、その期待は甘かったと言わざるをえない。夫婦関係や夫の家族との関係がうまくいかず、しかも諸々の理由で離婚もできず、苦しんでいる結婚移住女性たちが多数存在する。まずは多文化家庭内で外国人の妻または夫の文化を理解し、彼らのアイデンティティを尊重することが、多文化共生へのもっとも重要な第一歩ではないだろうか。それを手助けするために、外国人の嫁の夫および姑が嫁の母国の文化と接する機会を多文化家族支援策の一環として導入することを提案したい。『列伝』の第2部で試みたような嫁の実家での滞在プログラムを財政的に支援するのもいいだろう。経済的な事情によりなかなか里帰りできない移住女性のみを対象に実施するのもいいかもしれない。現在さまざまな多文化家族支援プログラムが行われており、なかには移住女性による自文化の紹介、家族への教育、地域住民との交流などもある。そうしたプログラムも一定の効果をあげていると思われるが、妻の国を訪れてそこの人々と交流しながら自ら異文化を体験してみることがより重要であろう。そうすることにより、妻や嫁への理解が一層深まり、またそれが国民の多文化受容度を高めることに大きく貢献するものと思われる。

注)

- 1) 総数2,524,656人のうち、長期滞在者が1,731,803人、短期滞在者が792,853人、不法滞在者390,281人（韓国統計庁2019）。結婚移民者（韓国の統計には結婚移民者と表記）は166,882人、帰化者は176,915人、外国人住民の子どもは226,145人（韓国統計庁行政安全部2018）
- 2) 多文化家族法によると、「多文化家族」とは韓国国民との結婚により韓国に移住した外国人

- や韓国に帰化した者、その夫婦から生まれた韓国国籍を有する子供がいる家庭を指す(第1条)。たとえ「多文化」な家族であっても、韓国以外の異なる国同士の外国人が結婚した家庭は国の支援対象となっていない。あくまで将来的に韓国国籍を取得する者、韓国国籍の子供を出産し、養育していく家庭に対して支援が行なわれる(第2条)。多文化家族の規模は、結婚移住者本人(帰化者を含む)+その配偶者+その子供で80万人超である(韓国統計庁 2018)。
- 3) 『列伝』は、筆者本人がEBSの会員となり年間購読料を支払ってウェブ版で視聴した。
- 4) 「サドン」とは姻戚の意、または姻戚どうしが互いに呼ぶ語。
- 5) 韓国中央日報 2020年2月27日(ウェブ版)
- 6) 2020年6月時点での韓国の失業率は4.1%、15~24歳:10.7%、25~29歳:10.2%であり、OECDの平均8.0%(全体)、17.9%(若者)よりかなり低い。実際は若者の多くが失業状態にあるのに、なぜ韓国の失業率は統計上において低い水準を維持しているかという点、その主な理由としては①15歳以上人口に占める非労働力人口(就職を希望しない人口)の割合が高いこと、②非正規労働者の割合が高いこと、③自営業者の割合が高いことなどが挙げられる[ニューズウィーク日本版 2020年8月14日ウェブ版]
- 7) 韓国の未婚率(2015):20~24歳(男98.8%、女96.8%)、25~29歳(男90%、女77.3%)、30~34歳(男55.8%、女37.5%)、35~39歳(男33%、女19.2%)。生涯未婚率:男10.9%、女5.0%、初婚年齢(2019):男33.4歳。女30.6歳(韓国統計庁・保健社会研究院 2015、2019)
- 8) 韓国中央日報 2020年2月27日(ウェブ版)
- 9) 韓国統計庁(고용노동부)「고용허가제 외국인근로자(E-9) 국가별 도입현황2019」(雇用許可制外国人勤労者(E-9)国家別導入現況2019)
- 10) 1970~2005年までに、五つの年を除き出生性比は107~116.5の間(自然な状態での性比は女児100人に対し男児が105~106人)である。これは超音波機器を利用して、1980年以降韓国で実施された「胎児性鑑別」による結果である[李삼식ほか 2007:28~29]。最近では考え方の変化などにより出生性比は正常範囲となっている。
- 11) 2018年の多文化家族実態調査研究によると、配偶者との意思疎通に困難を感じている者は21.1%おり、女性は23.1%と全体より高い。年齢別にみると29歳以下が33.4%と最も高く、年齢が高いほど困難さが減少している。東南アジア出身者は軒並み30%を超えておりほかの国よりも意思疎通に難しさを感じているようである。また夫婦の一日の平均会話時間は30分~1時間未満が30.5%でもっとも多く、2時間以上は28.5%、30分未満は17.1%となっている[女性家族部 2019]。
- 12) 2018年の多文化家族実態調査研究によると、夫との葛藤の中でもっとも多いのは性格の違い(54.8%)である。配偶者の家族との葛藤は8.9%があると答えており、女性は9.7%と全体より高い。年齢別では2、30歳代が高いが、結婚期間が長くなれば葛藤が解消するものでもないようである。出身国別では日本人が18.1%と最も高い[女性家族部 2019]。
- 13) 2018年の多文化家族実態調査研究によると、多文化家庭の所得(月)は、200万~300万ウォンの世帯が26.1%と最も多く、100万ウォン未満の世帯も9.7%ある。また生活保護を受けている世帯は5.7%(17,513世帯)である[女性家族部 2019]。
- 14) 2018年の多文化家族実態調査研究によると、女性の経済的自立の必要性について、88.7%が賛成しており、女性の賛成率は90.1%ときわめて高い[女性家族部 2019]。
- 15) 番組自体は今も続いているが、2020年の分を省いたのは、コロナ禍の影響で番組の重要な構成の一つである嫁の故郷への訪問が途中からできなくなり、これまでの内容と変わっているからである。また2019年までの『列伝』の総数は300本を超えているが、EBSのウェブサイトにはアップロードされていないものもあり、最終的に視聴できたのが292本である。
- 16) 該当事例の放送日:2013年11月8日・12月6日、2014年11月27日、2015年9月3日、2016年6月30日・7月14日・7月28日、2017年8月31日、2019年1月24日・5月30日・10月21日
- 17) こうした傾向は、日本の農村に住む多文化家族にもみられ、移住女性と夫の家族との間に葛藤を引き起こしている事例が詳細に報告されている[桑山紀彦 1995:97~108]。移住女性の日本文化への適応を過度に要求する山形の事例もある[中澤進之右 1996]。
- 18) 該当事例の放送日:2013年11月1日・11月8日
- 19) 2018年の多文化家族実態調査研究によると、結婚移住者たちが韓国で文化的な違いを感じる第1位が食習慣(50.7%)、第2位がコミュニケーションのスタイル(39.6%)である[女性家族部 2019]。

- 20) ここでいう挨拶とは、「こんにちは」「ありがとう」「いってらっしゃい」のようなものに限らず、家族（とくに目上の人）が外出や仕事から帰宅したときに声をかけたり、労いの言葉をかけるなどを含めて幅広い意味で使われる。
- 21) 外国出身の嫁の家事の優先順位が韓国の主婦とは異なることがある。たとえば、一般的に韓国の主婦は食事後すぐに後片付けをし、また家の中を毎日掃除するひとも多い。番組の中の嫁たちは後片付けをすぐにはやらず、また毎日子供が散らかした部屋をまめに片付けたり掃除をしたりするひとが少ない。
- 22) 韓国の主婦は家事を含めた仕事を「早く、効率よく」やることを重視するが、多文化家庭の嫁たちはなかなかそれができず、「行動が遅い」といわれてしまう。たとえば、常夏の国ではじっとしているだけでエネルギーを消耗するため、韓国の主婦のように家事をすると体がもたなくなってしまう恐れがある。そのためか、彼らは自分の体力に合わせてゆっくり仕事をするきらいがある。
- 23) 該当事例の放送日：2014年2月14日（結婚8年目のベトナム嫁）
- 24) 該当事例の放送日：2014年3月27日、2016年1月7日・9月1日、2017年6月1日、2018年3月1日・8月9日・8月17日・12月27日、2019年3月21日・8月8日・9月30日
- 25) 調査は標本調査であり、対象は一般国民4,000人（19～74歳）、青少年4,000人（中学校80校+高校80校）である。結果は全体、一般国民、青少年の3種類で集計している。

参考文献

安藤純子

2009「農村部における外国人配偶者と地域社会—山形県戸沢村を事例として」『GEMC Journal』1、26—41

李善姫

2012「ジェンダーと多文化の狭間で—東北農村の結婚移民女性をめぐる諸問題」『GEMC Journal』7、88—103

小川玲子、王増勇、劉曉春

2010「東南アジアから東アジアへの国際移動と再生産労働の変容」『アジア女性研究』第19号、18—38

奥島美夏

2008「序説 インドネシア・ベトナム女性の海外進出と華人文化圏における位置づけ」《特集

東アジアの家事・介護をめぐる女性の域内移動：台湾の外国人労働者と結婚移民の事例から》『異文化コミュニケーションズ研究』20巻、21—42
金愛慶ほか

2016「韓国の多文化家族に対する支援政策と実践の現況」『名古屋学院大学論集・社会篇』第52巻 第4号、113—144

桑山紀彦

1995『国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族』明石書店

佐々木祐

2019「第7章 韓国における<多文化家族>支援制度—地域社会を生き抜く外国人女性たち」藤井勝・平井晶子編『外国人移住者と<地方的世界>』昭和堂、171—196

田村慶子

2018「東南アジアにおけるジェンダー問題の発生と展開」川村晃一編『東南アジア政治比較研究』調査研究報告書 アジア経済研究所、45—59

中澤進之右

1996「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識」《特集2 わが国における国際結婚とその家族をめぐる諸問題》『家族社会学研究』8、81—96

藤井勝、平井晶子

2019『外国人移住者と<地方的世界>』昭和堂
馬兪貞

2009「日本と韓国の農村における国際結婚—実態と原因、問題点を中心に比較・分析」『国際関係論集』第9号 立命館大学、159—184

馬兪貞

2011「韓国の都市と農村における国際結婚の比較研究—全羅南道における二つの地域を中心に」『国際関係論集』vol.23—3 立命館大学、202—223

尹靖水ほか

2012「韓国の多文化家族における外国人妻の日常生活に関連した苛々感と精神的健康の関係」『評論・社会科学』No.102 同支社大学人文学会編、23—37

尹靖水、近藤理恵編

2013『グローバル時代における結婚移住女性とその家族の国際比較研究』学術出版会

(韓国語)

김민정, 유명기, 이해경, 정기선

2006「국제결혼 이주여성의 딜레마와 선택：베트남과 필리핀 아내의 사례를 중심으로」(結

- 婚移住女性のジレンマと選択：ベトナムとフィリピンの妻の事例を中心に) 『한국문화인류학』 39 (1)、159—193
- 김오남
2006 「국제결혼 이주여성의 부부갈등 결정요인 연구」(結婚移住女性の夫婦間葛藤の要因に関する研究) 『가족과 문화』 18 (3)、63—106
- 김이선, 김민정, 한건수
2006 『여성 결혼이민자의 문화적 갈등경험과 소통증진을 위한 정책과제』(結婚移住女性の文化的葛藤の経験とコミュニケーションのための政策課題) 한국여성개발원
- 김태원
2012 『결혼이주여성의 삶과 적응』(結婚移住女性のライフと適応) 대구카톨릭대학교 다문화연구소 경인문화사
- 설동훈, 이해경, 조성남
2006 『결혼이민자 가족실태조사 및 중장기 지원정책 방안연구』(結婚移民者家族の実態調査および中長期支援政策についての方案に関する研究) 여성가족부
- 신경희, 양성은
2006 「국제결혼가족의 부부갈등에 관한 연구」(國際結婚家族の夫婦間の葛藤に関する研究) 『대한가정학회지』 44 (5)、1—8.
- 양애경 외
2007 『국제결혼이민자에 대한 지역사회의 수용성 연구』(國際結婚移民者に対する地域社会の受容に関する研究) 한국여성정책연구원
- 오명석 편
2016 『아시아, 이주의 중심을 가다 베트남 편』(アジア、移住の中心を行く：ベトナム編) 서울대학교 출판문화원
- 우현경, 정현심, 최나야, 이순형, 이강이
2009 「다문화가정 어머니의 한국어능력과 유아기 자녀의 언어발달」(多文化家庭の母親の韓国語能力と幼児期子供の言語発達) 『아동학회지』 30 (3)、23—36
- 윤형숙
2004 「국제결혼 배우자의 갈등과 적응」(國際結婚の配偶者の葛藤と適応) 최협 외 편 『한국의 소수자, 실태와 전망』 한울 아카데미, 321—349
- 이명현
2009 「텔레비전 오락프로그램에 재현된 결혼 이주여성 : 사돈 처음 뵙겠습니다를 중심으로」(テレビの娯楽番組に再現された結婚移住女性 : 「サドン、はじめてお目にかかります」を中心に) 『다문화의 이해』 도서출판 경진, 310—329
- 이삼식
2007 『국제결혼가족의 결혼·출산 행태와 정책방안』(國際結婚家族の結婚・出産の形態と政策) 한국보건사회연구원
- 이순형
2006 『국제결혼 농촌 이주여성 가족의 정착지원 방안』(農촌 국제결혼 정착방안 세미나 자료집) 『農村의結婚移住女性・家族の定住への支援』 농촌진흥청, 농업과학기술개발연구소
- 이혜경
2005 「혼인이주와 혼인이주 가정의 문제와 대응」(結婚移住とその家庭における問題と対応) 『한국인구학』 28 (1)、73—106
- 전경수
2008 「차별의 사회화와 시선의 정치과정론 : 다문화가정 자녀에 관한 예비적연구」(差別の社会化と視線の政治過程論：多文化家庭の子供に関する予備的研究) 『한국문화인류학』 41 (1)、10—48
- 정기선, 김영혜, 박경은, 이은아, 박지혜, 이승애, 이지혜
2007 『경기도내 국제결혼 이민자가족 실태조사 및 정책적 지원방안 연구』(京畿道の結婚移民者家族の実態調査および支援政策についての研究) 경기도가족여성개발원
- 정은희
2004 「농촌지역 국제결혼 가정 아동의 언어 발달과 언어 환경」(農村地域の國際結婚家庭の児童の言語発達と言語環境) 『언어 치료연구』 13 (3)、33—52
- 정일선, 김명화
2004 『국제결혼 외국인 여성의 적응을 위한 정책과제』(結婚移住女性の適応のための政策課題) 경북여성정책개발원
- 조영달 외
2006 『다문화가정의 자녀 교육 실태조사』(多文化家庭の子供の教育に関する実態調査)(2006년도 교육부 정책과제 보고서) 서울대학교 사범대학
- 한건수
2006 「농촌지역 결혼이민자여성의 가족생활과 갈등 및 적응」(農村の結婚移民女性の家族生活と葛藤・適応) 『한국문화인류학』 39 (1)、195—243
- 한국여성
2004 「이주의 여성화와 국제결혼」(移住の女性化と國際結婚) 『이주의 여성화와 국제결혼 이주여성인권센터 창립 3주년 심포지엄』 이주

여성인권센터, 1—16

参考資料

『多文化夫婦列伝』（2013～2019）、韓国教育放送（EBS）

『2018年多文化受容性調査』統計庁・女性家族部 2019

『2018年全国多文化家族実態調査』（報道資料）女性家族部 2019

『2019年婚姻・離婚統計』（報道資料）統計庁 2020

参考ウェブサイト

「女性家族部（韓国）」

http://www.mogef.go.kr/mp/pcd/mp_pcd_s001.do?mid=plc505（最終閲覧：2020年10月10日）

「統計庁（韓国）」

<https://kosis.kr>（最終閲覧：2020年10月20日）

「中央日報（韓国）」2020年2月27日（ウェブ版）

<https://news.joins.com/article/23716520>（最終閲覧：2020年10月10日）

「ニューズウィーク日本版」2020年8月14日（ウェブ版）

<https://news.yahoo.co.jp/media/newswweek>（最終閲覧：2020年10月5日）

ABSTRACT

Conflicts and Mutual Understanding among the Members of Multicultural Family in South Korea: A Korean TV program featuring relations between Korean mothers-in-law and her foreign daughters-in-law”

KIM Kisook

Key words: multicultural family, international marriage, conflict, mutual understanding

In South Korea, international marriages, particularly Korean-East and Southeast Asian marriages, have rapidly increased since 2000.

The purpose of this paper is to point out the significant conflicts between foreign women married to Korean men and their mothers-in-law and to propose a meaningful suggestion for mutual understanding among them. The Korean EBS TV program entitled “Day-to-day Life of a Korean mother and her foreign daughter-in-law in a multicultural environment” with an intention to understand such multicultural family situations, is quite useful and meaningful. We can find three major factors of conflicts in each multicultural family between a Korean mother and her daughter-in-law in the above television program.

Firstly, the basic lack of gender equality or gender roles should be mentioned. In contemporary South Korea, gender roles are still rigid. Most of the mothers-in-law who emphasize the role and responsibility of daughters-in-law in a household do not like their sons to do domestic chores.

Secondly, the generation gap and cultural differences must not be forgotten. Most of the foreign daughters-in-law who have been forced to accept Korean culture and traditional relations with their mothers-in-law, say that those cultural and societal difference have been a big source of stress.

Thirdly, the lack of collaboration and communication between foreign wives and their Korean family members are also very serious and stressful.

These eventually lead to a feud between a foreign wife and other members of the family. In order to solve these problems, it is important for Korean husbands and mothers to understand the cultural background of their foreign wives. For this purpose it would be quite effective to provide Korean mothers with opportunities to visit the countries of their daughters-in-law. Financial support to be offered for multicultural families is also essential.